

# 「百五十年史」と早稲田大学の創立期

大日方 純 夫

## 一 「百五十年史」編纂への取組み

早稲田大学理事会は、本年（二〇一一年）二月二日付で「WASEDA VISION 150」を発表した。二〇三二年の創立一五〇周年に照準をすえた長期プランである。「百五十年史編纂」は、そのなかの文化推進関係の主な検討事項に含まれている。

「早稲田大学百五十年史」の編纂自体は、すでに昨年（二〇一〇年）六月、編纂委員会の設置によって正式にスタートしていたが、いよいよ二〇年後の〈創立一五〇周年〉に向けた年史編纂事業が現実味を増してきたのである。

百五十年史編纂の取組みについて、二〇一〇年七月の第一回編纂委員会開催までの経緯は、本誌前巻掲載の吉田順一前所長の論稿に詳しいので、それ以後の経過を簡略に記しておくことにする。

編纂委員会ではそのもとに専門委員会を設置し、具体的な検討作業をすすめることとしていたが、二〇一一年度には二回にわたって編纂専門委員会を開催した。五月一八日の第一回専門委員会では、百五十年史の基本的な考え方、出版物の構成、資料収集の見通し、編纂日程の見通しなどについて協議した。十一月九日の第二回専門委員会では、百五十年史の基本的な構成、関連出版物の準備とデータベース化・Web版、資料収集、編纂作業用の年表作成、専門委員の新規委嘱などについて協議した。

これらを踏まえて、一二月九日、二〇一一年度の第一回編纂委員会を開催し、一、編纂の基本方針に関する件、二、百五十年史および関係出版物の構成に関する件、三、資料収集に関する件、四、編纂日程に関する件、五、専門委員の委嘱に関する件、について協議・決定した。

一、編纂の基本方針に関しては、つぎの三点が承認された。

①編纂準備委員会報告（二〇一〇年三月二九日）を踏まえて編纂をすすめる。②新しい時代に対応した新しい年史の編纂をめざす。データベース化・Web版等の充実を同時進行させて、編纂を進める。③大学史資料センターの機能に即した推進をはかり、編纂のプロセスを重視する。早稲田学等との連携をはかり、自校史教育の推進に役立てる。また、アーカイブズ機能を確立するための推進力とする。

二、百五十年史および関係出版物の構成に関する承認事項は、つぎのとおりである。

#### 1. 百五十年史の構成

(1) 編纂準備委員会報告を踏まえた第一回編纂委員会の確認にもとづき、全三巻構成を基本とする。

(2) 巻別構成は編纂準備委員会報告のA案をベースとし、各巻の区分は、大学の制度的な転換を指標としておこなうものとする。おおよその内容区分は、以下の通り。

第一卷 創立～戦前期（専門学校令・大学令下の早稲田）

東京専門学校の開校（一八八二年～）、専門学校令下の早稲田大学（一九〇二年～）、大学令下の早稲田大学（一九二〇年～）、戦争と早稲田大学（一九三七年戦時下～終戦・戦後復興まで）

第二卷 戦後～一九九〇年頃（創立百周年事業まで）

新制早稲田大学の発足（一九四九年～）、高度経済成長期の早稲田大学、創立百周年と早稲田大学（一九八二～一九九〇年頃）

第三卷 一九九〇年頃以降

一九九〇年代（大学設置基準の大綱化以後）、創立一二五周年（二〇〇七年）まで、Next125からVision150へ

(3) 大隈重信個人にかかわる詳しい叙述は『百年史』に譲り、東京専門学校創立期の叙述を充実させて、創立経過と建学理念の明確化をはかる。

(4) 別巻は想定せず、部局・箇所については本編のなかで扱う。

(5) 各巻本文の分量（ページ数）の目安は、平均八〇〇～八五〇ページとする。なお、判型・組み方（タテ組・ヨコ組の別）については、今後、検討をすすめる。

(6) 出版状況の推移を見定め、紙媒体とは別の新たな形態（媒体）による刊行にも対応できる準備を重ねる。

2. 関連出版物

(1) 写真集 データベースの充実を前提として企画を準備する。

(2) 資料集 当面、『早稲田大学史記要』を活用して、資料の整理・公開をはかるとともに、基本資料のデータベース化とその公開をはかる。

(3) 事典(大学事典・人名事典) Web版のデータベース化を進行させ、その充実と活用の促進をはかりながら、成果を蓄積して、事典形式の出版を展望する。

三、資料収集については、つぎの各項が承認された。

① 本部関係資料―諸機関との連携を強化して、まず、所蔵状況の把握・整理をすすめ、編纂関係資料の所在状況の明確化をはかり、基本資料の収集をすすめる。② 学部・箇所関係資料―新設・改組関係を中心に基本資料を収集する。③ 校地・建築関係資料―企画・建設課などに依頼して図面などの関係資料を収集する。④ 個人資料。⑤ ヒアリング―戦後編のために、系統的なヒアリングを早急に組織化する。

四、編纂日程に関しては、二〇一一年から一四年にかけて、巻数・内容・スケジュール等の策定、資料収集と目録化、テーマ別資料集等の編集などをすすめること、二〇一五年から一九年にかけて、第一巻の執筆・編集と第二巻以降の準備をすすめること、二〇二〇年には第一巻を校正・刊行するとともに、第二巻の執筆・編集に着手し、二〇二六年にはこれを刊行すること、第三巻については、二〇二一年から準備をすすめ、二〇二六年から執筆・編集に取り組んで、創立一五〇周年の二〇三二年には刊行し、全三巻の完結をはかること、二〇二九年から学生向け冊子・写真集・DVD等の編集に着手し、二〇三二年には刊行すること、が確認された。

なお、人名事典、写真集のデータベース化の状況について、「早稲田大学人名事典データベース」を具体化するため、既存の人物事典などを利用し、戦前期に活躍した故人で百年史索引に複数回登場する者から、まず一〇〇名を選定して、年度内を目処にWeb版データベースを作成中であること、広報課から移管された写真、および『早稲田学報』掲載の写真を対象にデータベースを作成中である旨の報告があった。

以上が百五十年史編纂の現状である。本『記要』では、この事業とかわかって、今回から「早稲田大学百五十年史」

欄を新設し、編纂事業の進捗状況を報告するとともに、編纂過程において収集・整理した史料の紹介をおこなったこととした。

また、『記要』本巻には百年史の編集実務に従事した方々に集まっていた催した座談会の記録を掲載した。この座談会は、百年史の編集員をつとめ、本センターの前身大学史編集所の所長でもあった正田健一郎先生（昨年八月に逝去）を偲びつつ、百年史編纂を踏まえて百五十年史を展望したいと考えて企画したものである。

## 二 東京専門学校と学生生活―創立期研究の豊富化のために

一二月に開催された百五十年史編纂委員会は、百五十年史では東京専門学校創立期の叙述を充実させていくことを確認した。一方、前述の座談会で強調されたことの一つは、学生に軸足をおく大学史が重要だという指摘であった。

では、東京専門学校（1）の創立期、学生の様子はどのようなものであろうか。この点について、真辺将之『東京専門学校の研究』は、「学問の独立」の言葉に代表される創設者たちの建学の理念に関しては、わりとよく論じられているが、その一方で、初期の学生たちの気風や、彼等がどのような活動を行っていたかということに関しては、明らかになっていない部分が多い」として、『早稲田大学百年史』でも初期の学生たちの様子について、ほとんどページが割かれていないと指摘している。その一因は、この時期の史料不足にあるが、真辺書はそれを克服すべく、新潟県出身の広井一（2）の関係史料や、卒業生たちの後年の回顧録を活用して、学生たちの気風や活動状況を解明している。

しかし、学生生活の実際については、なお必ずしも明らかではない。そこで、以下にその一端を示す事実を紹介してみることにする。

東京専門学校の「寄宿舎事務日誌」を見ると、明治二二（一八八八）年二月一七日の項に、「荒木轄二郎退舎届ヲ出ス、大綱作之助、横田三九郎入舎ス」と記されている。<sup>(2)</sup>この横田三九郎は、埼玉県入間郡鶴馬村（現富士見市）出身の青年で、一八七〇年生まれである。最初、彼は東京農林学校予備校<sup>(3)</sup>に入学したものの、一八八八年二月、これを退校して東京専門学校の英語予科に入学した。その間の事情を、彼は二月三日付の手紙で、兄の源九郎につきのように説明している。<sup>(4)</sup>

小生学校ノ事件ハ小生モ少シハ存意有之タレト、福太郎様ノ御意見且又年限モ長キトノ事故拝承致シ、先月ヨリ農林予備校ハ退校シ、尊兄之出京ヲ待居リシニ、不幸ニモ尊兄ハ種々ノ御差支モ有ルナラン、来駕無之、空シク遊居ルモ遺憾ナリシカ、丁度十二月一日午込早稲田私立東京専門学校現外務大臣ニテ改進黨ノ長ナル大隈重信氏設立シ、日本語英語ニテ法律学政治学ヲ教授ス、英語ニテ法律学ヲ為ス□（虫損）ニハ予科四年本科三年ニテ英語予科ノ入学試験アリ、□（虫損）小生モ受ケシ所三年目ノ級ニ入学許サレタリ、今年ヨリ五年目ニテ英語法律卒業、来年七月農林学校ニ入ルトセハ今年ヨリ七年、因テ今月ヨリ入学致シ候ニ付御報知申上候

一二月一日に東京専門学校で英語予科の入学試験があり、受験したところ三年目の級に入学することとなった、この学校は現外務大臣で改進黨の長でもある大隈重信氏が設立したもので、日本語と英語で法律学・政治学を教授している、英語の法律学科には予科四年と本科三年があるので、今年から五年で卒業できる、というのである。三九郎はこれにつづけて、一ヵ月間の月謝と寄宿料は五円で、前金で納める規則となっているため、これを破ると授業停止を命じられると述べて、厳しい措置がとられることを訴えた。そして、当月分として、入学料一円と書籍・月謝・寄宿料の合計七円を大至急送るなり、話したいこともあるので持参して至急出京してほしいと依頼した。

三九郎が受験した一八八八年二月一日は、実は東京専門学校の歴史にとっても、重要な節目にあたっていた。こ

の年一〇月、東京専門学校は予科を新設し、また、これまでの英学科を改正して、英語普通科と、英語で政治・法律を教授する英語専門科を設置することにしたのである。予科は政治科、第一・第二法律科、英語普通科に入ろうとするものの準備のために設置し、在学期間は二年間であった。英語普通科は英語専門科に入ろうとするもの、もしくは英語を専修しようとするもののために設置され、在学期間は二年間、英語専門科は英語政治科・英語第一法律科（司法科）・英語第二法律科（行政科）の三科にわかれ、在学期間は三年間であった。つまり、英語法律科に進むためには、予科二年、英語普通科二年を通過することが必要であり、卒業までには七年を要することになる。

三九郎が予科四年としているのは、おそらく本来の予科と英語普通科をあわせて、本科である英語法律学科の前段階だと考えているからであろう。

一〇月三日付『讀賣新聞』掲載の東京専門学校の広告は、つぎのように述べている。

本校今般予科を新設し、且従来の英学科を改正し英語普通科及び英語を以て教授する政治、法律、行政の三科を設く。入学志願の者は第一募集期（十一月九日）若くは第二募集期（十一月廿日）迄に本校事務所へ申込あるべし。

但し入学試験は第一第二募集期の翌日午前十時より執行し、授業は第一募集期終るを俟ちて直ちに始む。規則書望みの者は郵便二銭を送るべし。

こうして東京専門学校は、十一月一日と十二月一日の二回にわたって新設学科の入学試験を実施し、応募者一五八名中、八二名が合格した。<sup>(5)</sup> そのなかには横田三九郎の名もあつたはずである。

東京専門学校は、もっぱら外国語をもつて講義する東京大学を批判し、邦語で教育することを掲げて誕生した。しかし、帝国大学との間の学問的な差が外国語の力の不足にあることを認めて、従来の邦語による政治学科・法律学科のほかに、英語による政治学科と法律学科を新設することにしたのである。<sup>(6)</sup> 『早稲田大学百年史』はこれを、「東京専

門学校を大学の域にまで前進させようとする小野の理想」が緒についたものとみて、「学苑は、明治二十一年十一月には、既に大学（中略）の内容をその一部に保持するまでに飛躍した」と評している。<sup>(7)</sup>

前掲の手紙で、三九郎は一カ月の月謝と寄宿料だけで五円かかるが、差し当たり入学料・書籍代・月謝・寄宿料などとして七円を大至急送ってほしいと頼んでいた。そこで二月七日、兄の源九郎は東京に出て弟のもとを訪れ、厳しい家計の状況を説明しつつも、学費等を送ることを約束した。<sup>(8)</sup>そして、一二月分の月謝と下宿料の内金三円を渡した。さらに一二日には、残金三円を小為替で送った。こうして、三九郎は東京専門学校に入学することになり、一日、寄宿舎に入った（同前手紙による）。二八日にも、源九郎は一月分の月謝・寄宿料を送っている。

ところで、三九郎の実家横田家は、代々鶴馬村の名主をとめた家柄であり、兄弟の父親である源吾も、明治維新当初、取締名主（大庄屋）をつとめていた。<sup>(9)</sup>一八七二年に地方制度が大区小区制に改められてからは、第四小区の戸長に任ぜられていた。ところが一八七五年一〇月、源吾は三四歳で死去した。この時、源九郎（一八六四年生れ）がまだ二三歳（数え年）だったため、親族会議の結果、一七歳になるまで叔父の横田福太郎が戸主を相続することとなった（前掲三九郎書簡に出てくる人物である）。その後、源九郎は一八八二年二月から戸主となったが、弟が東京専門学校に入学した時は、まだ二四歳であった。

こうして三九郎はもっぱら兄からの仕送りにたよって、新たな学生生活を始めた。その生活ぶりをしのばせる金銭出納帳「Note Book of Treasury」が残っているので、つぎに紹介しよう。<sup>(10)</sup>

出 之 部  
第 一 月

時 日	金 高	使 用 法
明治廿一年 十二月卅一日	1. 53	明治廿一年度決算ノ際不足ヲ補フ故ニ本年ノ出 金ニ非ズ
十日	2. 80	当一月分専門学校賄料并ニ舍費払
十三日	1. 80	当月分月謝金
三日	. 36	フランネルシャツ代金
十五日	. 24	筆紙及ビ炭代
廿日頃	. 50	一月分二月分講義録代
廿五六日頃	. 60	paper oil food & 雑誌洋紙
一日ヨリ卅日迄	. 30	其他ニテ
総 計	6. 60	当一月中費用
第 二 月		
二日	1. 80	当二月分専門学校月謝
〃日	. 10	雑誌其他ニテ
四日	. 07	諸品代金
十二日	. 05	国民之友四十一号
十一日	. 03	憲法発布式小遣
十二日	. 03	湯銭及ビ新聞代
十四日	. 08	四谷へ持参ノ菓子代
十五日	. 13	下駄及ビ湯銭
十七日	. 06	日本理財雑誌一号
〃日	. 05	中判洋紙及ビ玉子代
廿一日	. 06	ハカマ洗濯賃
〃日	. 11. 5	帽子記章代、憲法雑誌一号代
〃日	. 03	諸種買物
六日	2. 80	当月分専門学校寄宿料
廿四日	. 07	国民之友及ビ湯銭
廿六日	. 02	Bread
廿八日	. 03	湯銭及ビ新聞
総 計	5. 62. 5	当二月中ニテ
第 三 月		
二日	. 05	亀井戸梅見ノ途次諸品代金
四日	. 43	スパンサー氏教育論代価金
〃日	. 15	チャールスラム氏セキスペアー譚代金
〃日	. 045	国民之友第四十三号代
五日	. 12	教科書ヂユードニー代価

〃	. 04	Post paper and Bread
六日	. 05	湯札代金
十一日	2. 90	三月分月俸舎費納ム
十三日	1. 80	三月分月謝金納ム
十六七日頃	. 10	諸費總計
廿一日	. 155	国民之友四十四号、菓子、理髮代金払フ
廿四日	. 15	蒸菓子其他食品
廿七日	. 15	徒然草絵抄二冊
〃 日	. 20	菓子、鶏卵及ビ食品
廿九日	. 10	湯札代金払
卅日	. 08	菓子代
總 計	6. 530	当三月中ニテ
第 四 月		
一日	1. 80	専門学校月謝
二日	. 07	国民之友及ビ雜品
四日	. 13	蒸菓子代金
十日	2. 90	月俸及ビ舎費納ム
十四日	. 30	小金井看桜費
十七日	. 10	向島及飛鳥山看桜費
廿日	. 10	国民之友No45・47代
廿一日	. 05	玉子代価
廿四日	. 08	国民之友No48、Bread and Washer
卅日	. 06	諸品代
總 計	5. 59	第四月中
第 五 月		
一日	1. 80	専門学校月謝
六日	. 125	足駄一足代金
〃 日	. 05	理髮代価
十日	2. 90	当月分月俸舎費納
〃 日	. 14	人力車并ニ馬車代
十一日	. 45	国民之友五十号代
十二日	. 72	徒然草文段鈔七冊
十二日・十三日	. 18	食品其他人力車代
十四日	. 27	大学病院薬料二日分
〃 日	. 10	人力車夫ニ払フ
十七日	. 43	大学薬代. 24 人力車. 08 玉子. 04 火鉢代河合氏ニ渡ス. 07

十八日ヨリ廿日迄テ	. 64	薬代一日分. 12 人力車. 35 牛肉. 05 砂糖、 五徳、シヤボン. 12
廿四日	. 35	薬代并人力車

## 収 入 之 部

月 日	金 高	目 販
明治廿一年		
十二月卅日	4. 00	書籍代及ビ当月分諸費トシテ
一月廿日	5. 00	当月諸費及ビ来月分内トシテ
四日	. 20	吉田丁小林ヨリ
二月三日	5. 00	二月分不足金トシテ
同日	2. 00	三月分内へ
三月十九日	8. 00	三月分残金四円 四月分二円及ビ書籍価二円
四月十七日	3. 00	四月分諸費内エ
五月一日	2. 00	四月分残金1. 00 and 五月分1. 00也
五月十日	6. 00	兄出府ノ節 当月分残金并ニ来月分内トシテ
五月十八日	3. 00	病氣薬料等之為メ

時 借 金 覚 (但シ後二国ヨリ出金アルナレ)  
バ会計外ナリ

1. 40	河合勉氏ヨリ	三月十一日	廿一日返済
1. 00	田島氏ヨリ	三月十三日	廿一日返済
1. 00	吉田町小林ヨリ	同日	廿七日返済
1. 00	河合氏ヨリ	四月十日	廿日返済
. 50	田島氏ヨリ	〃	〃 返済
. 50	湯浅氏ヨリ	〃	廿一日返済

## 時 貸 金 覚

1. 00	仁王頭辰二氏ニ貸ス	三月廿六日	五月一日済ム
-------	-----------	-------	--------

一八八九年一月・二月の月謝は一円八〇銭、寄宿舎料は二円八〇銭である（三月からは月俸・舎費三円九〇銭となっている）。東京専門学校の学費、つまり月謝は、創設当時、一円であつたが、一八八六年三月、厳しい学校経営を打開するために大幅値上げに踏み切つた結果、一円八〇銭となつていた。<sup>(11)</sup> 文具や、菓子・食品、衣類、湯銭・洗濯代・理髪代といった生活費のほかに、当時の青年に広く読まれた雑誌『国民之友』を毎月購入しているのは、いかにも学生らしい。二月に天野為之が創刊した『日本理財雑誌』や、やはり二月創刊の『憲法雑誌』を早速、購入している。金銭出納帳の「スペンサー氏教育論代価」と「チャーレスラム氏セキスパー譚代金」は、一八八八年一〇月に定められた英語普通科課程表にある「スペンサー氏教育論」と「ラム氏シエークスピア譚」に対応している。<sup>(12)</sup> 二月には、憲法発布式の小遣いに三銭をあて、三月には亀戸へ梅見に出かけ、四月には小金井・向島・飛鳥山に花見に出かけている。東京専門学校では、四月一七日、講師・得業生・学生七百余名が参加して、大運動会を桜の花の見ごろの飛鳥山で開催した。相撲・綱引などの競技をしてから弁当を食し、夕方まで鯨飲したという。<sup>(13)</sup> 出納帳の飛鳥山看桜費の支出は、ちょうどこの日に記載されているから、三九郎もこの運動会に参加したのかもしれない。

こうして青年三九郎は、東京専門学校の学生としてのスタートをきつた。しかし、東京専門学校の校友名簿類をいくら探してみても、彼の名前は見つからない。それもそのはず、彼は入学のわずか半年後、病にたおれて、一八八九年六月に死去してしまつたからである。五月半ば以降、薬料と人力車代が頻出するようになるのは、おそらくその兆候であろう。主を失つた金銭出納帳は、六月以降、空白のままである。

地方で教育を終えた青年のなかには、向学心や立身出世への希望をいだいて東京に出、各種の学校に通うものがあった。一八八八年一二月一日は、東京専門学校の改革と青年三九郎の青春の選択がスパークした交差点であつた。三九郎は入学からわずか半年、志なかばで世をさつた。しかし、東京専門学校はこうした青年たちの夢と期待に支えられ

て、草創期を乗り越えていったのである。

二〇一二年は早稲田大学創立一三〇年の年であり、同時に小野粹生誕一六〇年、大隈重信没後九〇年の年にあたる。本センターでは、二〇一二年秋に、創立一三〇年を記念して、大隈・小野の出会いと東京専門学校の創立に焦点をあてた企画展を開催する予定である。学生諸君をはじめ、多くの方々に早稲田大学創立期の実際を知っていただくことを期すとともに、この企画を「百五十年史」に向けて創立期研究の豊富化をはかつていく節目にしたいとも考えている。

### 註

- (1) 真辺将之『東京専門学校の研究』早稲田大学出版部、二〇一〇年、一二〇頁。
- (2) 早稲田大学図書館特別資料室蔵(特別ト一〇一七七一)。
- (3) 東京農林学校とは、一八八六年、農商務省所轄の駒場農学校と東京山林学校の合併によって開設された学校で、東京大学農学部の前身にあたる。なお、ビタミンの発見などで知られる農芸化学者鈴木梅太郎は、一八八九年、東京農林学校予備校から東京農林学校に入学たというから、三九郎と同一時期、この予備校に在学していたかもしれない。
- (4) 埼玉県富士見市教育委員会蔵「横田正志家文書」三四〇
- (5) (横田源九郎「日記帳」)。
- (6) 早稲田大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学、一九七八年、五五四頁。
- (7) 同前、五六四頁。
- (8) 同前、五六五頁。
- (9) 前掲の横田源九郎「日記帳」に記載された二月二〇日付の三九郎の手紙による。
- (10) 富士見市教育委員会編『横田正志家文書目録(Ⅱ)』富士見市教育委員会、一八八九年、「解説」。
- (11) 富士見市教育委員会編『富士見市史 史料編5 近代』富士見市、一九八八年、三一四～三一七頁。
- (12) 前掲『早稲田大学百年史』第一巻、五一七～五二六頁。同前、五五九頁。なお、すでにハーバート・スペンサー

の『教育論』を尺振八が訳した『斯氏教育論』（一八八〇年）、チャールズ・ラムの『シエークスピア物語』を品田太吉が訳した『セキスピヤ物語』（一八八六年）が、それぞれ刊行されている。

(13) 『讀賣新聞』一八八九年四月二〇日付。